

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 樫永真佐夫

樫永真佐夫氏の博士学位申請論文「黒タイの系譜認識と祖先祭祀——家霊簿資料を例として」は、ベトナム西北地方に居住する黒タイ族についての詳細な民族誌的研究である。この集団についての人類的・民族誌的研究は、第二次大戦前のフランス植民地時代にいくつもの前例があるものの、その後長い間空白となっていた。本論文はその空白を埋める貴重な労作である。黒タイは言語系統上広義のタイ系民族の内に数えられるが、自分たちは父系の親族体系を持つと観念し祖先祭祀中心の信仰体系を持つなど、中華文明的な特徴も示す。このことはすでに知られていたものの親族組織や祭祀の実態は明白になっていなかった。本論文は長期のフィールドワークに基づいて実態を明らかにし、一方の中華文明圏、他方の双系的とか、「ゆるやかな構造」とか言われる東南アジア圏との接点に位置する民族の社会・文化における移行域的様相を示したものである。全体は5章からなり補遺として179ページに及ぶ詳細な資料が付されている。

最初の序章では、筆者が「家霊簿」と訳する個別家族の祖先の名を列記した文書に着目してベトナム西北部の黒タイ族を研究することの意味が説かれ、また村落生活のありさまと民族間関係が論じられる。家霊簿の朗誦は家族の祖先祭祀の時に不可欠である。筆者は人類学における親族研究の歴史、東南アジア大陸部における人類学的親族研究の流れ、さらに中・韓など東北アジア地域における父系親族集団研究といわゆる族譜研究を、相互に結びつけながら振り返り、家霊簿に着目したこの研究がこれらをつなぎ合わせ、研究の新しい展望を開くことを明らかにしている。筆者が調査収集した家霊簿は古クメール系の黒タイ固有文字で書かれた手書きの文書であり、これを黒タイ出身の碩学を師として読み解き、原文、筆者が作成した黒タイ文字フォントによる写本、日本語訳と詳細な校注を補遺として提示しているのは、本論文のもうひとつのきわめてオリジナルで価値の高い貢献である。

第2章「黒タイの文字文化における家霊簿」は、黒タイにおける文字と文書の社会学というべき章である。他のタイ語系諸民族と同様に、黒タイは文字と文書を有しているが、東北アジアと比するならばオーラルな性格が強い。そうした社会における文字と文書がいかなるものであり、どのようなタイプの文書と書記媒体があり、どのように扱われ用いら

れるかが、識字率や文書と読み書き能力との継承の問題も合わせ詳述されている。地域や時代を問わずオーラルなコミュニケーションと文字文化との関係一般を考察する研究者にとって、本章は興味深く詳細な事例を提供する。

第3章「黒タイ家霊簿の形式と内容に関する分析」では、筆者が10ヵ村から収集した各家族の家霊簿について、相互間の異同も明らかにしながら詳細に論じられ、その上に立って黒タイの父系理念がどのように村落生活の中で認識されているかが明らかにされる。従来のフランス人やベトナム人による研究が、黒タイの親族組織を父系の同姓集団ないしクランと特徴づけていたのに対し、筆者は黒タイの家霊簿にはひとつの同姓集合全体が父系的な系譜関係に基づくひとつの血縁集団であることを示す意志がないという、重要な指摘を行う。姓の継承、相続、日常の家族・親族関係と行動、さらには嫁を与える一族と嫁を受け取る一族との特別な関係など、筆者は現地調査に基づく広いデータを活用し、中華文明圏と東南アジア圏との狭間に位置する黒タイにおける父系観念の性質を的確に解明することに成功している。

第4章「家霊簿の読者と読書」は、家霊簿の用途、誰にどのように読まれるのかを論じている。家霊祭の時には家族の長たる男子によって家霊簿が読まれるのだが、それは儀礼過程の一部であり、音読し参加者の皆がそれを聞くという共同行為である。そこには識字能力の問題があり、家霊簿の保持・使用は村落社会内の上層に偏る。さらに地域的政体のかつての首領家族の家霊祭は、その政体全体の祭祀でもあったことが語るように、家霊簿の作成、保持、使用は政治的行為であった。また筆者は、近年のベトナムにおける市場経済化の波の中で、新たに家霊簿が作成されたり、祭壇、墓その他の祖先を記憶するものが数を増している状況も明らかにしている。文字文化論から政治・経済にまでいたる興味深い論述である。

第5章「終章」は全体のまとめであり、家霊簿が個人の姓名の列挙であって儀礼の場の行動の道具であり、一族の淵源や祖先の名誉の文字記録ではない点を再確認する。そこから、一見中華文明周辺域における漢族的族譜の模倣のように見える黒タイの家霊簿が、タイ系諸言語を話す東南アジア大陸部諸民族の個人中心的で双系的な特徴と結びついていることを述べる。

本論文は家霊簿という黒タイ独特の文字資料の緻密な研究であるが、それを柱としつつ黒タイの家族、親族、信仰、村落生活などのデータが豊富に紡ぎ出されたユニークな民族誌である。筆者は現地におけるフィールドワークと土地に残る文字資料の徹底的な読みにより、東アジア、東南アジアにおける民族誌的研究に新たな提起を行った。先行研究の量との関係で、中国、韓国との比較が充実しているのに対し、東南アジアにおける家族や系譜、祖先観の諸事例との比較分析はまだ出発点にとどまっているが、すでにその方向ははっきり示しており、今後の研究の発展が期待される。以上により、本論文提出者は文化人類学の研究に対して重要な貢献をなしたと評価される。したがって本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。